



〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目2-2 本郷ビル9F
日本神経科学学会

TEL: 03-3813-0272 FAX: 03-3813-0296
E-mail office@jnss.org

Neuroscience 2005 第28回日本神経科学大会
事前参加登録の締切は 平成17年5月31日(火) 12:00

日本神経科学学会 会員各位

第28回日本神経科学大会 (Neuroscience2005) は、2005年7月26日(火) - 28日(木)パシフィコ横浜にて開催します。一般演題の採択の可否を筆頭著者にメールにて連絡致しました。まだ連絡が来ない方は、大会事務局(neurosci2005@congre.co.jp)までご連絡ください。尚、学会会員の登録が完了していない方は、筆頭著者として演題発表することができませんのでご注意ください。

今大会は、特別講演5、シンポジウム44、共催セミナー12と演題数が多く、ポスター討論時間も他のプログラムと重複しないように配慮した為、早朝より夜までの開催となりました。現在予定しているプログラムの概要を末尾に掲載致します。一般演題の詳細を含んだプログラム冊子およびCD-ROMは、6月下旬に事前参加登録された方のお手元に郵送する予定です。

事前参加登録の締切りは上記の通り5月31日です。事前参加登録費は、当日参加登録費より、正会員で2000円、学生会員で1000円お安くなっております。学会員の利便性向上の一環として、今大会より参加費の支払方法を、従来の郵便振替に加えて、クレジットカード決済、銀行口座振込、コンビニ決済の中のどの方法でも可能としましたのでご利用頂きたく存じます。多数の方が事前参加登録されますようお願い致します。

目 次

Neuroscience 2005 第28回日本神経科学大会	
事前参加登録の締切は 平成17年5月31日(火)12:00	1
7th IBRO WORLD CONGRESS OF NEUROSCIENCE	5
ブレインサイエンス振興財団平成16年度研究助成贈呈者決定	6
平成17年度日本神経科学学会奨励賞受賞者が決定	6
ホームページのリニューアルについて	7
津本忠治先生最終講義印象記	8
CREST 報告会に参加して	9
“ The Brain and Us: Neuroethics, Responsibility and the Self ” シンポジウム (American Association for the Advancement of Science(AAAS)主催)	9
シンポジウム・研究会のお知らせ	12
研究助成	19
公募	22
その他	24
編集後記	25

7th IBRO WORLD CONGRESS OF NEUROSCIENCE

Melbourne, 12-17 July, 2007.

日本神経科学学会各位

既にご存知の方もおられると思いますが、2007年7月12日より17日までオーストラリアのメルボルンで第7回IBRO世界大会が開催されます。このたび国際プログラム委員会より Symposia, Plenary Lectures 及び Satellite Meetings の提案募集の案内がまいりました。締め切りは今年の6月30日となっております。下記の募集案内文を、ご一読のうえご検討下されば幸いです。よろしくお願い致します。

津本忠治 日本神経科学学会会長

Call for Proposals for Symposia, Plenary Lectures and Satellite Meetings

The Australian Neuroscience Society is hosting the 7th IBRO World Congress of Neuroscience in 2007. The President of the Congress is George Paxinos and the Secretary-General Frederick Mendelsohn. The Local Organizing Committee (Secretary Andrew Lawrence; email a.lawrence@hfi.unimelb.edu.au) can be contacted for details about the meeting.

An International Programming Committee has been set up to consider proposals from neuroscientists world-wide for symposia, plenary lectures and satellite meetings as a basis for a very exciting Program at the Congress. Proposals on any topic in neuroscience can be submitted. IBRO is keen to ensure that the Congress will focus on new areas of interest that extend beyond the topics covered in most past international neuroscience meetings. Plenary lecturers will be selected preferentially for their position at the forefront of new developments rather than for their accumulated wisdom in traditional areas of research. Symposia and satellite meetings that are planned around novel topics and future directions or on recent technical developments will be viewed most favourably, particularly when they present a multi-disciplinary approach

to the subject. Inclusion of speakers representing excellence from different countries will be viewed favourably.

Proposals in the format requested will be accepted until a closing date of 30 June 2006. The International Programming Committee will review the proposals and select the ones that will present a most exciting international program covering a wide range of neuroscience. The Committee may subsequently invite proposals in order to ensure an attractive and complementary diversity of subject matter and stimulating speakers. In terms of speaker support, the following will apply. Plenary speakers will receive gratis registration plus a support package to contribute towards travel costs. Symposium speakers will receive gratis registration. Satellite meetings are expected to be self-funded, and are encouraged to be held in the broad Australasian geographic region.

Abstracts for posters will be called for in October 2006 with a closing date at the end of December 2006. Submissions in all areas of neuroscience would be welcome. Material that is aimed at understanding better how the brain and nervous system work in health and disease or that brings the results of cellular/molecular and animal studies closer to human brain function is encouraged. Selected posters will be presented at the end of each session in a discussion group under a facilitative chairperson.

Elspeth McLachlan
Chair, International Programming Committee,
7th IBRO World Congress of Neuroscience
March 2005

Proposal for Symposium/ Plenary Lecturer/
Satellite Symposium (please delete as
appropriate).

Topic (max 2 lines)

Organizer(s) and their affiliation(s)

Proposed Speaker(s) (up to 4 for a symposium and

25 for a satellite meeting) and tentative titles to indicate the coverage from each speaker. It is vital to indicate that the listed speakers have confirmed their intent to participate.

(attach separate page(s) as necessary)

Summarize (in <200 words) the topic(s) to be covered, why this person/ group is the best to present it and how the presentation will help the broader neuroscience community to understand the topic and its current and potential significance.

Indicate how this speaker/ combination of speakers will bring novelty and diversity to the discussion of this topic (<100 words)

How many countries are represented in your choice of speakers? Justify if there is more than one speaker from a single country.

How do you propose to fund the speakers' airfares and expenses?

ブレインサイエンス振興財団 平成 16 年度研究助成贈呈者決定

財団法人ブレインサイエンス振興財団(伊藤正男理事長)は、生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている 45 才以下の研究者の中から毎年原則として 1 名を選び【塚原伸晃記念賞】を、またブレインサイエンス研究分野において独創的で国際的評価に値する研究を行っている研究者の中から毎年約 8 名を選び【研究助成金】を贈呈している。

【平成 16 年度 塚原伸晃記念賞受賞者】2 名

岡部 繁男

東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科教授
「分子可視化技術による神経細胞の機能解析」

酒井 邦嘉

東京大学 大学院総合文化研究科助教授
「脳機能マッピングによる言語処理機構の解明」

【平成 16 年度 研究助成金受領者】9 名

伊藤 功

九州大学 大学院理学研究生物科学部門助教授
「脳の左右差が形成され、維持されるしくみ」

大沼 信一

ケンブリッジ大学 Hutchison/MRC 研究グループリーダー

「神経系統的発生における細胞分裂制御の役割」

酒井 宏 筑波大学 大学院システム情報工学研究科助教授

「面知覚を基礎とする情報の選択と表現」

榊原 伸一 獨協医科大学 医学部解剖学助教授

「成体脳での神経幹細胞特異的遺伝子の役割」

関 和彦

自然科学研究機構 生理学研究所助手

「随意運動の制御におけるシナプス前抑制の役割」

高森 茂雄

東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 COE 特任講師

「グルタミン酸神経終末の分子多様性」

尾藤 晴彦

東京大学 大学院医学系研究科助教授

「CaMKK/CaMK カスケードの神経機能解明」

平井 宏和

金沢大学 学際科学実験センター助教授

「グルタミン酸受容体リン酸化と運動学習制御」

吉見 靖男

芝浦工業大学 工学部応用化学科講師

「電気化学ポンプを用いた人工シナプスの開発」

平成 17 年度日本神経科学学会 奨励賞受賞者が決定

平成 17 年度日本神経科学学会奨励賞は下記の方々が受賞される事に決定しました(括弧内に所属と申請課題を示します)。授賞式は第 28 回日本神経科学大会会期中に、開催されます。

小畑 浩一博士(兵庫医科大学、一次知覚ニューロンにおける BDNF 発現調節と疼痛発生への影響)

高森 茂雄博士(東京医科歯科大学、小胞型グ

ルタミン酸トランスポーターの同定とその性状解析)

中村 和弘博士 (Oregon Health & Science University、自律性生理機能の中枢制御システムの解明)

松崎 政紀博士 (自然科学研究機構 生理学研究所、中枢神経細胞樹状突起スパインの構造・機能関連の研究)

ホームページの リニューアルについて

この度、日本神経科学学会のホームページを大幅にリニューアルすることとなり、ホームページ編集小委員会を中心に作業を続けています。改定の目的は次の2点です。

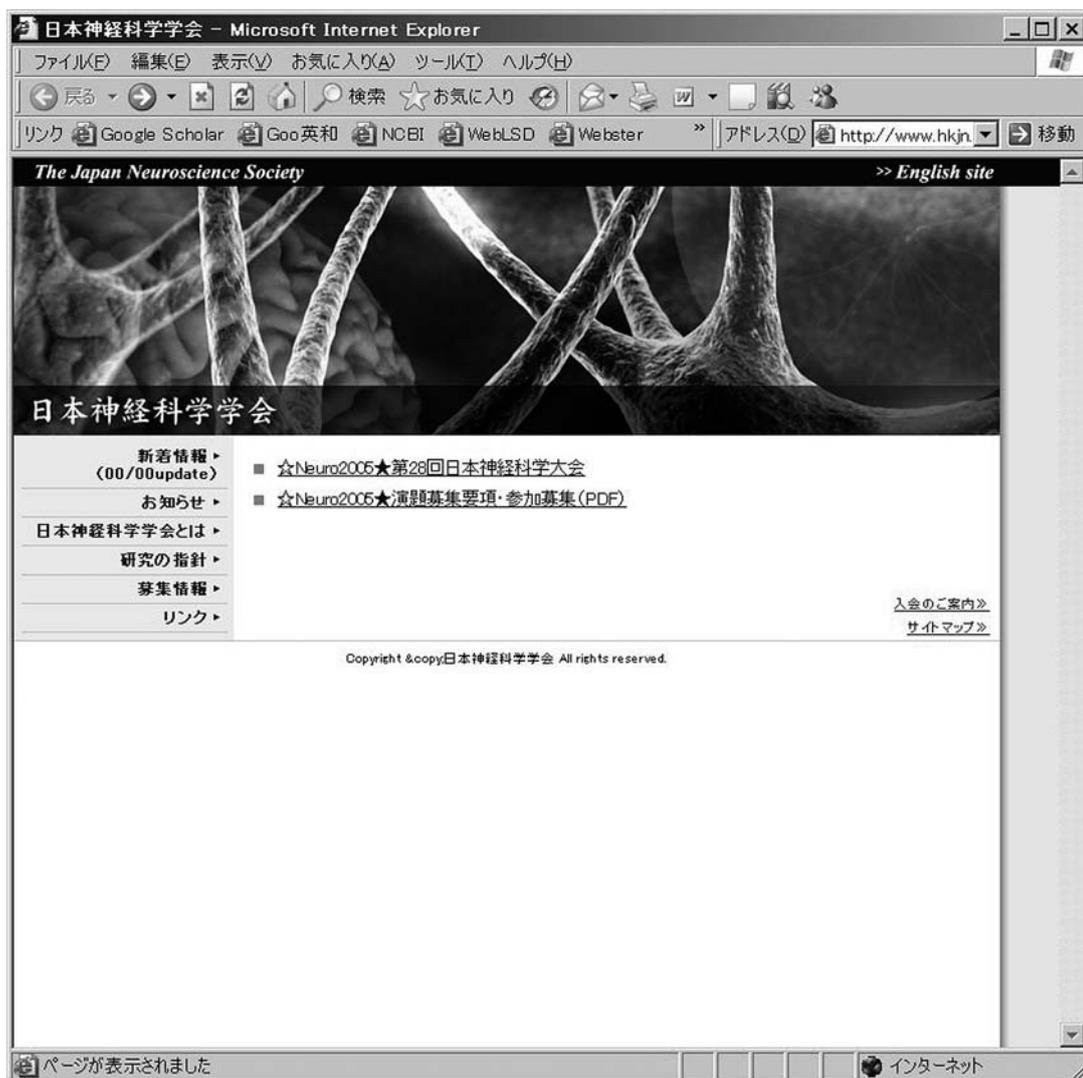
1) ホームページをより魅力的なものとして、学会会員数の増加とともに一般の人々への学会に対する理解を深めていただく。このためには、ホームページ上に載せるコンテンツの充実と

もに、アメリカの神経科学学会のように、ホームページから会員の連絡先を検索できるシステムの構築などを含めて検討しています。

2) ホームページ編集委員の個人的努力に頼らずに、永続的に安定したホームページの維持・改定ができるような体制を作る。このためには、信頼できる外部業者に一部業務を委託する方向で進めています。

まだまだ改定途上ですが、新しいホームページの案の一つを下図に示します。是非、「こんな内容がほしい」「あんな機能がほしい」といった希望など皆様のご意見をホームページ編集小委員会までお聞かせください。また、下図では適当な図を拝借させてもらっていますが、ホームページの背景や各種リンクボタンに使用できるような、著作権の絡まない図(例えば神経細胞の美しい染色像など)があれば、是非お送りください。

ホームページ編集小委員会 委員長 柚崎 通介
(myuzaki@sc.itc.keio.ac.jp)



津本忠治先生最終講義印象記

鳥取大学大学院医学系研究科
生体高次機能学部門
畠 義郎

平成17年3月4日、大阪大学医学部講義棟で日本神経科学学会現会長である津本忠治先生最終講義が行われました。最終講義には、岩間吉也先生、中馬一郎先生、志賀健先生、垂井清一郎先生、山本長三郎先生、久野宗先生、金澤一郎先生ら、津本先生ゆかりの名誉教授、大阪大学の同期の教授陣、50名近い門下生らが出席し、終始和やかに講義が進められました。津本先生は、長年にわたって、大脳皮質視覚野における特徴抽出性を支える神経回路とその生後発達について、さらに発達期視覚野に特徴的に現れる神経可塑性のメカニズムについて、主にシステム神経科学的視点から研究を続けてこられました。講義では、先生が携わってこられた多くの研究課題の中から、グルタミン酸が視覚野での興奮性伝達物質であること、神経栄養因子が視覚野の可塑性に関わることなどいくつかの成果の概要が、その頃の回想を交えながら語られました。今回、その印象記を書くようにとの依頼を受けましたが、筆者はずいぶん長い間津本先生の研究室にお世話になり、図やエピソードの一つ一つから様々なことが思い出されました。そこで、思い出話のようなものを書きますが、お許しいただきたいと思います。

もう20年ほど昔、筆者が大学院生として津本研究室で始めたのが、スパイクの相関解析による視覚野内神経連絡の研究でした。すでに先輩が視床で同じ手法を用いた研究をされていたのですが、なかなかややこしい手法で、神経生理学の初心者には容易に理解できませんでした。視床用に使っていた解析プログラムで実験を開始したものの、視覚野の実験には不十分であること、新しいシステムを用意するのに200万円近くもかかることがわかりました。高額でしたが是非必要なものでしたので、恐る恐る購入をお願いしたところ、すんなりと認めていただきました。当時津本先生も着任されて日が浅く、研究費が潤沢であったわけではありません(と記憶しています)。よくまあ、新米院生の要望に応えてそれだけの投資をしていただけたものだといふことになって感謝していますが、何とか新しい方法

をものにしようという、津本先生の熱意に助けをいただいたものと思っています。

新しいアプローチで局面を開いていこうという姿勢は津本先生の一貫したもので、その後も引き続き様々な手法を取り入れられました。筆者が参加した当初は全動物標本でのスパイクの頻度解析が主たる方法でしたが、その後今思いつくだけでも、スライス標本、マイクロダイアリシス、ホールセルクランプ、光学計測、カルシウムイメージング、細胞形態の定量解析、免疫組織染色等々、およそ全脳標本で仕事をしている神経生理学者が手を出すには逡巡するような解析を次々と導入されました。対象も培養細胞から全動物標本まで、あるいはトランスジェニックマウスからサルまでと、急速に発展する神経科学の研究手法とともに、研究目的に照らして適切な実験系を躊躇無く選択され、現在は遺伝子導入技術で標識した機能分子の動態解析に取り組んでおられます。

有望な技術をどんどん取り入れようという姿勢は素晴らしいのですが、最初から熟練者がいるわけではないので、担当した者が四苦八苦することもありました。その研究室で確立された手法を学び実験を行えば、効率よく研究を進められるのですから、津本先生の姿勢は効率優先というわけではなく、「あの新しい方法を使うとどんなことがわかるだろう」という研究者らしい衝動が底にあったのだらうと思います。しかし、この四苦八苦が重要なので、私もなかなか相関解析の結果が出ないままに過ごした時に考えたことが、その後の研究の方向に大きく影響しています。

そうこうしながらも、筆者も得られた結果をなんとか北米神経科学学会で発表することができました。初めての海外での発表でしたが、自分と同じようなところに興味を持つ多くの人々と会って心強く思い、有益な suggestion も得られ、自分でも成長したつもりで帰ったところ、津本先生には分野の異なる人々とどれほど議論できたのかと問われ答えに窮したものでした。「興味を同じくする人とはいつでも議論できる、異なる分野の人に自分の研究がどれほどの意味を持つのか、それを常に意識なさい」ということであつたと理解しています。これもまた、常に新しいアプローチや視点を求める津本先生の叱咤激励であつたと感じています。

今回の最終講義を拝聴しながら上に書き連ねたようなことを思い出しましたが、講義自体もこれまでのご研究を俯瞰するだけでなく、あらためて研究姿勢を表明されたような印象がありました。大阪大学を去られても、脳科学総合研究センター

で新しく研究をスタートされる津本先生にとって、最終講義はまとめではなく経過報告であったのだろうと勝手に思っています。次にどんな結果を見せていただけるのかを楽しみにしながら、ご健康と益々のご活躍をお祈りして筆を置くことにします。

CREST 報告会に参加して

船曳和雄
京都大学医学部
先端領域融合医学研究機構

「脳の機能発達と学習メカニズムの解明」を目標とし、平成15年10月に発足されたCREST研究班の第2回報告会(3月8日、千里ライフサイエンスセンター、研究総括 津本先生)に参加した。

最初に新規採択された5つのグループの研究代表者(伊佐先生、鍋倉先生、西条先生、ヘンシュ先生、大隈先生)からの発表があり、それから発足後1年半経過した6つのグループの発表があった。櫻井グループはBrain Machine Interface ; 「念じるだけでそれが実現するか」という切り口で、脳の電気生理、解剖、及び数理的解析と最終出力の筋電信号解析からこの問題にアプローチしておられた。酒井グループは言語、第2外国語の習得過程などでの脳活動の解析から学習のメカニズムの解明を試みておられた。多賀グループは乳児や胎児の行動パターンや光トポグラフィーなどの非侵襲的手法を駆使した研究で、極めて若い時期のヒトでの学習、発達過程を研究されていた。杉田グループは、サル、ヒトを用い、かなりダイナミックな行動学的負荷を加えたとき(原色しか見たことのないサル、顔を見たことのないサル、逆転プリズム装着によるヒトでの行動観察)のヒト、サルの行動観察、脳機能画像を使った解析を発表されていた。中村グループはコミュニケーションの発達をテーマとし、そのための画像、行動発達学的手法を用いた研究を発表されていた。平野グループは小脳を対象とした学習機構の分子レベルから行動レベルにいたる体系的な解析を発表していた。

それぞれの発表ごとにとっても活発な質疑応答があり、予定時間を40分近くオーバーする形で進行した。全体の印象としてこの研究班のメンバーはかなり多方面にわたっており、通常の学会ではまず同じセッションに入ることはない方々の話が多いと

感じた。これらの話はとても新鮮で、「脳の発達と学習機構の解明」というテーマでの現在の各方面での状況を大まかに知るにはとてもいい機会だった。さらに同じテーマでも対象はマウス・ヒヨコからヒトまで、かつ研究手法もとてもバラエティに富んだもので、脳研究の難しさ(だから面白いんでしょ)も再認識した一日でした。

“ The Brain and Us: Neuroethics, Responsibility and the Self ” シンポジウム (American Association for the Advancement of Science(AAAS)主催)参加報告

福士珠美

Department of Neuroscience
University of Minnesota

アメリカの古都として、年中賑わいを見せているボストンの町が特に活気付くと言うボストンマラソンの時期にあわせるかのように、郊外の町ケンブリッジにあるMITキャンパスにおいて開催された American Association for the Advancement of Science (AAAS)主催の脳神経倫理シンポジウムに参加しました。ボストンは1999年以来、5年ぶりの訪問でしたが、落ち着いた佇まいは20世紀と変わらず、ケンブリッジの町とMITの近辺もアメリカの最高学府の一つと呼ばれるにふさわしい威厳を相変わらずたたえていました。ホテルから会場までの近道だという、大学の建物を結ぶ渡り廊下を延々と歩いていると、普段は病院勤めで若い学生とすれ違う機会がない私にとって、日本での学生時代を髣髴させる懐かしい空気を感じ、少し若返った気分になりました。

従来、神経科学分野では、「倫理問題」というと研究倫理(動物実験、インフォームド・コンセント、研究データの捏造・改変、第一著者の権利、研究費の不正使用、あらゆる科学場面における利害関係の排除など)を中心に研究者主体の範疇で議論されており、社会との関わりに関しては科学論や哲学・倫理学の領域で別個に扱われてきた印象がありました。一方、世界では20世紀後半

に生命科学全般の科学技術の発展に伴う社会問題を取り扱う Bioethics という学問領域が確立され、日本でも関連領域の研究が進み始めました。そして、1990年代から現在にかけて、ヒトの脳活動の非侵襲的計測機器の飛躍的な発達により、脳計測による心理的プライバシーの保護・教育現場および社会現場への脳科学の急激な介入など、従来にはない社会問題が懸念されています。このような流れを踏まえて、2002年5月に米国サンフランシスコで "Neuroethics: Mapping The Field" カンファレンスが開催され、主催者および参加者によって "Neuroethics" すなわち脳神経倫理という研究分野の発足が宣言され、この新しい言葉をキーワードに持つ原著論文が以降3年間の間に急激に増えてきました。今回のシンポジウムもこのような潮流のなかで、生命科学全般の社会倫理研究および政策提言を行う団体である AAAS が特別に脳神経倫理に焦点をあてて一年前から企画・準備してきたものであり、数ある神経科学研究分野の中でも最新の、そしてまだまだ発展させるべき余地の残った研究領域であるともいえます。

シンポジウムは4月17日～19日の3日間行われ、宗教学・哲学・社会学・法学など、神経科学の実験現場とは異なる観点を持つ分野の研究者、そして高校の教師など、教育現場の一線に立つ人々も集い、総勢170名余という、小規模ながら熱心な議論が交わされました。脳神経倫理という領域をこれからいかに発展させるべきか、という観点から異分野の人同士の「対話(Dialogue)」を大事にした形式でプログラムが進められ、一つのセッションでパネリストが発表するのは15分、4～5人の発表の後、討論の時間が一時間設けられるという変則的な時間配分で、中には、討論のための質問カードをプレゼンテーション中に作成して提出することを呼びかけるパネリストもいました。発表者の略歴はプログラム中で紹介され、全参加者の所属と連絡先の掲載されたリストが最終日に配られたりと、個人情報保護がうたわれて久しいこのご時世には珍しい情報公開ぶりでした。また、昼食時には、ランチディスカッションとして、毎日3つから4つのトピック(例「自我とは?」、「遺伝子工学と脳と心」、「倫理教育の目的とその限界」等)を掲げて20人ほどのグループを作り、各自がサンドウィッチをほおぼりながらのカジュアルスタイルの討論の場も設けられました。一般

のパネルセッションもさることながら、このランチディスカッションは、異分野交流、新しい人脈を作るのにとっても役立つ場であったように思います。特筆すべきは、このランチディスカッションの企画・運営のすべてを、MITのCognitive Brain Science コースの大学院生が手分けして行っていたことです。彼らは神経科学者としての実験技法を学ぶのと並行して倫理的側面にも視野を広げることを、実践的に学んでいるのが印象的でした。私が一日目に参加したランチディスカッションは "Equality in the face of increased knowledge and difference" というトピックでしたが、話は「脳科学を教育現場にいかに浸透させるか」という方向に展開し、理科教育の現場で脳科学の実践を試みているノースカロライナ州の高校の先生、また大学での実験研究と並行して、大学に近い学区の公立高校で General Neuroscience の授業を正規の教育カリキュラムとして教えていると言う研究者(教育者?)の話など、普段の学会現場ではなかなか聞く事のできない内容を興味深く伺いました。アメリカでは National Standard のほか、State Standard として教育要領が決められており、ノースカロライナ州では生物の授業の一部を利用して脳科学を教えること、そしてそのための教科書が州主導で作られていると言うことで、脳科学を始めとする生命科学、生理学という項目を高校とは言わず、もっと低年齢(10歳以下)から教えるべきだと言う方向で討論が締めくくられました。これに反して「脳神経倫理はいつから教育現場に導入すべきか」を討論した最終日は、高校教師の多くが「時期尚早である」「脳科学の知識をつけ、現場を経験してからでよい」という見解を示したことは意外でありました。脳神経倫理はあくまでも脳科学の延長上にあるもので、まずは脳科学そのものの知識をつけるための教育に高校までは専従すべし、大学以上になって自分の意志で選択して学ぶ余地を持たせてよいという意見は、先に述べたMITの大学院生が並列的に技術と倫理を学ぶ姿勢と対照的であり、その教育学的根拠はどこにあるのか、興味を引かれながらも未だに私は明確な理由付けができないであります。

パネル発表のなかで印象的だったのは、最終日に行われた Neuroscience and Therapeutic and Non-therapeutic Interventions のセッションでした。神経科学研究によって発展した技術(従来の義肢に代わって、大脳皮質に直接チップを埋

め込んで検出した電気信号をもとに制御する義肢である Neuromotor Prosthesis などの紹介発表の後に、Neurotechnology (近頃は Neuro- と接頭語をつければ、なんでも造語できるという印象的でした)を「治療」として使うことは、医療倫理・生命倫理的にも理解できるが「機能促進(Enhancement)」として使うことはどこまで許されるのか、また障害の克服であれば、臨床的にゼロあるいはマイナスである身体運動の機能を健康な人のレベルに引き上げる(引き戻す)という起点がはっきりしているけれど、通常範囲にある個人の能力を飛躍的に向上させる「ポパイのほうれん草」的な神経科学の知見と技術革新の利用には、この「起点」と「到達点」の固体差を十分に考慮しなくてはならない、という生命倫理学者の発言は、神経科学の研究者・技術者のみならず、それを取り扱うメディアや受け取る側の一般社会にも戒めとなるものを感じました。もう一つ印象的だったのは、宗教と脳科学の関わり、中でも「仏教徒の死生観と脳科学・脳神経倫理」に関して関心を持っている研究者が世界には少なからずいるということでした。7つのパネルセッションのうち2つでこのトピックが取り上げられていました。でも、発表を聞く以前に、ダライ・ラマの用心棒かと見まがうような、現役僧侶でもあるパネリストの風貌とおそらくはチベットなまりでとうとう喋るその勢いに圧倒されて、さっぱり話のポイントをつかむことができずに終わってしまったのは心残りです。仏教以外にもイスラム教・ヒンズー教の宗教学者・神学論者などがパネリストに多く、アメリカはイスラム教を尊重する国との戦争とそれを推し進めてきたブッシュ大統領の宗教的背景から、宗教と脳科学を政策的に結びつけているのか、単にそれが本当にホットなトピックなのか、仏教徒の日本人である私には、これもまたさっぱり理解できないことではありました。しかしながら、神経生理に従事する者が思い描く倫理観だけでは補いきれないほどに、脳神経科学のもたらす知見というのが、すでに多種多様な倫理問題を巻き込んでいるのだということだけは実感できました。

冒頭でも述べましたが、Neuroethics というのはまだ発足したばかりの研究領域であり、今回のシンポジウムの収穫も異分野の研究者がこのキーワードの下に集い、対話をしたことである、という主催者の締めくくりに終わり、Neuroethics に関する政策提言・指針表明とい

う段階すら、まだまだ先であるという状態を再確認したに留まっています。しかし、参加者全員が互いの意見に耳を傾け、真剣に一つの学問領域として Neuroethics を作り上げようと言う気概に満ちた討論をする姿は、Society for Neuroscience などの神経科学領域が独立して歩み始めた30年ほど前の神経科学者達の姿だったのかもしれないと私の想像力をかきたてるに足るものでした。陽春という言葉そのもののような好天続きのなか、観光もろくにせず、会場近くのチャールズ川の景観も他人のデジカメで楽しただけと言う状態で議論に没頭した参加者達は、それでも達成感を持って解散したように感じました。

日本で神経科学研究に携わっている現役研究者の参加がほとんどいなかったことは、年度始めで海外出張の難しい時期であることを考慮しても、少々寂しい感じがしましたが、今年度の日本神経科学会で脳神経倫理に関連したワークショップが開催されるとのこと、どのような人たちが集い、どのような内容で議論が発展していくのか、とても楽しみです。実験的・技術的側面だけでなく、こうした社会全般や異分野との交流といった観点をもって神経科学と接することの意義と面白さを、本稿を通してその一端でも伝えることができれば幸いです。

INFORMATION

シンポジウム・研究会



第20回日本大脳 基底核研究会

- 基礎と臨床の融合を目指して -
[期日]平成17年7月9日(土)・10日(日)
[会場]シーパレスリゾート(愛知県豊橋市)
[オーガナイザー]南部 篤(生理学研究所生体システム研究部門)

[プログラム]

特別講演

Hitoshi Kita

(米国テネシー大・解剖神経生物)

シンポジウム I

基礎神経科学の教えるもの

鮫島和行(ATR脳情報研・計算神経生物)

粕山俊彦(生理研・脳形態解析)

伊佐 正(生理研・認知行動発達)

小柳清光(東京都神経研・神経病理)

シンポジウム II

JBAGS20年のあゆみと今後の展望

大江千廣(日高病院)

水野美邦(順天堂大)

金澤一郎(国立・精神神経センター)

柳澤信夫(関東労災病院)

シンポジウム III

大脳基底核疾患の新しい治療戦略

村田美穂(国立・精神神経センター・神経内科)

板倉 徹(和歌山医大・脳神経外科)

後藤 恵(熊本大・脳神経外科)

望月秀樹(順天堂大・神経内科)

一般演題・ビデオセッション募集中

[参加申込み・演題応募締め切り]

平成17年6月15日

詳細は、下記URL参照

<http://www.nips.ac.jp/jbags/>

[お問い合わせ先]

〒444-8585 岡崎市明大寺町字西郷中38

生理学研究所 生体システム研究部門

第20回日本大脳基底核研究会事務局

TEL:0564-55-7774 FAX:0564-52-7913

E-mail:jbags@nips.ac.jp



第10回認知神経科学会 学術集会のお知らせ

- 認知神経科学と臨床との接点 -

[期日]平成17年7月9日(土)～10日(日)

[会場] 京都大学医学部構内 芝蘭会館(稲盛ホール・山内ホール)

〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町

TEL 075-753-9336, FAX 075-753-9457

[会長] 福山秀直(京都大学高次脳機能総合研究センター)

[プログラム]

特別講演: MRI: Research tool for Cognitive Functions

演者: Denis Le Bihan (Director of SHFJ/CEA, Orsay, France)

イブニングセミナー:

Cognitive Impairments in Neurological Disorders: from Basic to Clinical

演者: TW Robbins (Cognitive Neuroscience, University of Cambridge)

シンポジウム:

1. リハビリテーションの科学: 脳の可塑性

2. 痴呆性疾患における認知機能障害

パネルディスカッション: 読み書きの認知科学など

[演題申し込み締め切り]

平成17年4月30日

詳細は、下記ホームページ参照

<http://hbrc.kuhp.kyoto-u.ac.jp/CNS10/>

[お問い合わせ先]

〒606-8507 京都市左京区聖護院河原町54

京都大学医学研究科附属高次脳機能総合研究センター

第10回認知神経科学会学術集会 事務局

TEL 075-751-3695, FAX 075-751-3202

E-mail: CNS10@bhp2.kuhp.kyoto-u.ac.jp



CNS * 05 計算神経科学学会 開催のお知らせ

1. 日時 2005年 7月17 ~ 21日
2. 場所 Madison, Wisconsin, U.S.A.
3. 参加申し込み・問い合わせ
<http://www.neuroinf.org>
4. 主催 Organization for Computational Neuroscience

The International Computational Neuroscience Meeting が、7月に米国中西部の Madison で開催されます。CNSは今年で14回目となる学会で、例年2・3百程度の演題が single-track oral と poster で発表されます。神経生物学の計算論にフォーカスした学会で、実験・モデル・理論的アプローチの論文が集まります。論文の審査基準として、生物学対応があげられているのが特徴で、神経科学学会の皆様にも興味深い学会と存じます。審査で高成績だった論文は、Neurocomputing 誌に research article として掲載される予定です。詳細については上記 web site をご覧下さい。(筑波大学大学院システム情報工学研究科 酒井 宏, Member, CNSO Board of Directors)

千里ライフサイエンス



セミナー

「睡眠とリズム - 遺伝子から行動まで - 」

日時 :
平成 17 年 7 月 19 日(火)10:00 ~ 17:00
場所 : 千里ライフサイエンスセンタービル5階ライフホール
主催 :
財団法人千里ライフサイエンス振興財団
協賛 :
株式会社千里ライフサイエンスセンター
着眼点 : - 眠れないあなたのために -
なぜ生物は眠るのか、快適な睡眠はどうした

ら得られるのか、睡眠には未だ解明されていない謎が数多くある。今や睡眠研究は広い分野にまたがり、様々な角度からの探究が進められている。最新の研究成果をもとに睡眠の謎の解明に迫る。

コーディネーター :

(財)大阪バイオサイエンス研究所
第2研究部 分子行動生物学部門
研究部長 裏出良博

プログラム :

睡眠覚醒の分子機構

(財)大阪バイオサイエンス研究所第2研究部
分子行動生物学部門 研究部長 裏出良博
生体リズムの基盤となる時計遺伝子の分子機構
神戸大学大学院医学系研究科 脳科学講座
分子脳科学分野 教授 岡村均

概日リズムと睡眠リズム - 2 振動体仮説の
分子生物学的基盤 -

北海道大学大学院医学研究科総合生理学講座
時間生理学分野 教授 本間研一

サーカディアン Ca^{2+} 濃度リズムと時計遺伝子
富山大学理学部 生物学科 生体制御学講座
助教授 池田真行

ヒスタミンH1受容体欠損マウスの睡眠 - 覚醒行動とヒスタミン神経系の変化

(財)大阪バイオサイエンス研究所第2研究部
分子行動生物学部門 研究員 黄志力
オレキシン産生神経による睡眠・覚醒状態の
安定化機構

筑波大学基礎医学系 薬理研究室
助教授 桜井武

長時間覚醒後のリバウンド睡眠の発生機構とその
必要性について

早稲田大学 先端バイオ研究所
客員教授 江口直美

概日リズム睡眠障害 - 最近の知見 -

滋賀医科大学 精神医学講座
教授 大川匡子

参加費(講演要旨集合含む): 3,000 円(会員: 大学・
官公庁職員、財団の賛助会員); 5,000 円(非会
員); 1,000 円(学生)

定員: 300 名

申込方法: 氏名、〒所在地、勤務先、所属、電
話およびFAX番号を明記の上、郵便、FAXまた

は電子メールで下記宛にお申込下さい。受付の通知を返送いたしますので、通知書に記載した振込先口座に参加費をお振込み下さい。入金を確認後、領収書兼参加証を送付いたします。

申込先：(財)千里ライフサイエンス振興財団
セミナー(V1)係

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル8F

TEL：06-6873-2001 FAX：06-6873-2002

E-mail：dnp-lsf@senri-lc.co.jp

(注：lsfは「エルエスエフ」、lcは「エルシー」)



第39回千里ライフ サイエンス技術講習会 『プロテオミクス技術 講習会「MALDI、ESI、 MS/MS、ナノLC、デー タ解析」』

日時・場所：

平成17年7月28日(木)午後1時～午後5時

千里ライフサイエンスセンタービル9階

903～905号室

平成17年7月29日(金)午前9時30分～午後4時

大阪大学蛋白質研究所

ねらい：タンパク質の発現解析、機能プロテオミクスを実施しようとしている研究者に対して、質量分析やLCを中心に新しい技術・手法を概説し、それらを用いた最近の応用研究について紹介する。実習では、MALDIやESIを搭載した装置を実際に用いて、試料の調製、MS及びMS/MS測定、データ解析やデータベース検索、定量解析等を体験しながら基礎とポイントを習得する。

コーディネーター：大阪大学蛋白質研究所プロテオミクス総合研究センター 高尾敏文

プログラム：

技術解説

1. タンパク質の質量分析とプロテオミクス
2. ナノLC / ESI、定量プロテオミクス

3. ナノLC / MALDI

4. データの実際と読み方

実演

1. MALDI、ESI

2. ナノLC

3. データ解析、データベース検索

4. タンパク質の同定

講師：大阪大学蛋白質研究所プロテオミクス
総合研究センター

高尾敏文、里見佳典

神戸大学バイオシグナル研究センター

吉野健一

東京大学医科学研究所コアララボラトリー蛋白質
解析室

福田宏之

定員：30名

参加費：5,000円

申込方法：(1)氏名、勤務先、所属、役職名、〒、所在地、電話、FAX番号を明記の上、郵便、FAXまたはE-mailで下記宛お申込みください。

(2)事務局より受付の通知をお送りいたしますので、そこに記載した振込先口座に参加費をお振込みください。

(3)入金を確認後、通常2週間以内に領収書兼参加証をお届けいたします。

申込締切：(定員になり次第締め切ります)

主催：財団法人千里ライフサイエンス振興財団
協賛：

ジャスコインターナショナル株式会社

マトリックスサイエンス株式会社

バイオリジカ株式会社

株式会社千里ライフサイエンスセンター

申込先：(財)千里ライフサイエンス振興財団

技術講習会 G39事務局

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル8階

TEL 06-6873-2001 FAX 06-6873-2002

E-mail tkd-lsf@senri-lc.co.jp



生理学研究所
生理科学実験技術
トレーニングコースの
お知らせ

自然科学研究機構 生理学研究所では、「分子・細胞レベルから個体レベルに至るまで人体の機能を総合的に解明する」ことを目標に研究を進めています。毎年夏期に、生理学分野に関心を持つ大学学部学生・大学院生、若手研究者(企業の研究者を含む)を対象とした実習形式のトレーニングコースを開催しています。実習では第一線で活躍している研究者の指導を直接受け、最新の実験の技術を学ぶことができます。詳細、参加申込方法などは下記ホームページをご覧ください。熱意・意欲ある方の応募をお待ちしています。なお、関連企画として7月31日(日)～8月1日(月)午前に、2つのレクチャーコース(「バイオ分子センサー」と「統合脳」)が開催されます。

日時:2005年8月1日(月)午後～8月5日(金)
場所:自然科学研究機構 生理学研究所(愛知県岡崎市)

講演

「大脳の局所神経回路」 川口 泰雄 (生理学研究所 大脳神経回路論部門 教授)

実習コース:

1. 位相差断層電子顕微鏡の原理と実践
2. 凍結割断レプリカ免疫標識法
3. in situ hybridization 法を用いた二重染色法
4. 超高压電子顕微鏡による生物試料の立体観察
- 5A. 局所神経回路構築の形態学的解析 A: 光顕二重染色法
- 5B. 局所神経回路構築の形態学的解析 B: 超薄連続切片シナプス観察法
- 6.2 光子励起顕微鏡法によるシナプス・開口放出の研究
7. パッチクランプ基礎実験技術法
- 8A. パッチクランプバイオセンサー法 A: パッチクランプバイオセンサー法によるATP放出解析

- 8B. パッチクランプバイオセンサー法 B: 穿孔パッチクランプバイオセンサー法による細胞内シグナル伝達解析
- 8C. パッチクランプバイオセンサー法 C: パッチクランプバイオセンサー法による温度受容解析
9. in vitro 発現系を用いたイオンチャンネル・受容体の機能解析
- 10A. スライスパッチクランプ法 A: 初心者体験コース
- 10B. スライスパッチクランプ法 B: 一般コース
11. ゼブラフィッシュを用いた神経回路機能の解析
12. 摂食・飲水行動発現機構入門
13. 電気生理学及び心理物理学的手法による視覚メカニズムの解析
14. 麻酔下動物での電気生理実験
15. 慢性動物実験法入門
16. 脳磁図によるヒト脳機能研究の基礎
17. 脳機能画像解析入門
18. 生理学実験のための電気回路・機械工作 - OP アンプによる増幅器とチェンバー作製 -

受講料: 10,200 円(予定)

申込方法: ホームページ上でのオンライン登録 (<http://www.nips.ac.jp/training/>)

申込期日: 2005年5月1日(日)～6月3日(金)

連絡先: e-mail: training@nips.ac.jp

主催: 自然科学研究機構 生理学研究所

共催: 日本生理学会、日本神経科学学会、自然科学研究機構「バイオ分子センサー連携研究プロジェクト」

文部科学省特定領域研究「統合脳」総括班
募集人員: 約150名



千里ライフサイエンス
技術講習会 第40回

「RNAiの哺乳動物個体への応用 - RNAi
トランスジェニック
マウスの作製」

日時: 平成17年8月2日(火)10:00-13:00(午前)

の部

14:00-17:00(午後の部)

場所:大阪大学微生物病研究所附属遺伝情報実験センター

ねらい:

現在、RNAi (RNA interference)法は哺乳動物細胞においても応用されており、生命科学において一般的な手法になりつつある。簡易に遺伝子の発現を調節できることから、遺伝子治療や遺伝子改変動物作製への応用も試みられており、マウスを用いた実験から哺乳動物個体においてもその有用性が確認されている。本講習ではRNAi法を用いた応用として、RNAiトランスジェニックマウスの作製法について技術解説と講師による模範実技を中心に紹介する。

コーディネータ:

大阪大学微生物病研究所附属遺伝情報実験センター 教授 岡部 勝

プログラム:

1. 技術解説:

RNAiトランスジーン構築からRNAiトランスジェニックマウスの作製に関して解説を行う。また、RNAiトランスジェニックマウスにおけるsiRNAの検出法などについても解説する。

2. 実習:

基本的には参加者の実習は行わない。実験に必要な設備等の見学と、講師によるマイクロインジェクション等の実演を行う。

講師:大阪大学微生物病研究所附属遺伝情報実験センター 教授 岡部 勝

大阪大学微生物病研究所附属遺伝情報実験センター 助手 蓮輪 英毅

参加者資格:

RNAiに関する基礎的な知識を有し、今後RNAiトランスジェニックマウスを作製しようとしている方

定員:午前の部 5名、 午後の部 5名

参加費:5,000円

申込方法:

・次の(1)~(3)を明記の上、FAXまたはE-mailで下記宛お申込みください。

(1)氏名、所属(大学もしくは勤務先)、役職名または学年、〒、所在地、電話、FAX番号

(2)午前の部、午後の部のどちらを参加希望するか、又はどちらでも良いか

(3)RNAiについての経験の程度

・申込締切後、参加いただく方に参加費の振込先口座番号をお知らせいたしますので、そこに参加費をお振込みください。

・当方で入金を確認次第、領収書兼参加証をお届けいたします。

申込締切:平成17年7月15日(金)(財団必着)。但し、定員を超過した場合は参加者の調整をさせていただきます。

主催:財団法人千里ライフサイエンス振興財団協賛:

オリンパス株式会社

株式会社ジーンデザイン

インビトロジェン株式会社

日本クレア株式会社

問合せ先:

財団法人千里ライフサイエンス振興財団 技術講習会 G 40 係

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル8階

TEL:06-6873-2001 FAX:06-6873-2002

E-mail:sng-lsf@senri-lc.co.jp

URL:http://www.senri-lc.co.jp

吉田 豊彦(財)

千里ライフサイエンス振興財団

〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町1-4-2

Tel:06-6873-2001 FAX:06-6873-2002

E-mail:sng-lsf@senri-lc.co.jp

http://www.senri-lc.co.jp



第30回組織細胞化学講習会 - 遺伝子、分子、小器官、細胞をみる -

実行委員長 内山 安男(大阪大学大学院医学系研究科情報伝達医学専攻機能形態学講座(A1))

日程 2005年8月3日(水)~8月5日(金)

(5日は技術講習会【Wet Lab】)

場所 講習会:大阪大学コンベンションセンター

技術講習会:大阪大学医学部キャンパス

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1
 テーマ「遺伝子、分子、小器官、細胞をみる」
 問い合わせ先

第30回組織細胞化学講習会事務局
 大阪大学大学院医学系研究科情報伝達医学専攻機能形態学講座(A1)

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-2
 TEL /06-6879-3120 FAX / 06-6879-3129
 URL / <http://www.nacos.com/jshc/koshu.html>

E-mail /(お問い合わせ 専用):
info_30kjshc@nacos.com

E-mail /(講習会 パンフレット 請求専用):
panf_30kjshc@nacos.com



The 6th Meeting of the International Society for NeuroImmunoModulation (ISNIM)

Meeting President: Prof. G.P. Chrousos, MD

Date: September 25-28, 2005

Abstract deadline: June 20, 2005

Registration Fee: ISNIM members, 250 /Euro;

Non-members, before June 20, 350 Euro

Location: Athens Hilton Hotel, Athens, Greece

Congress Web site: <http://www.erasmus.gr/congresses/isnim2005/>

ISNIM Web site: <http://www.isnim.org/index.html>

Topics

Cytokines signal transduction in the interaction of the nervous and immune systems
 Neuroendocrine immune basis of rheumatic diseases

Aging-Neuroendocrine and autoimmune adaptations in aging

Immunomodulatory neuropeptides and other substances

Neuroimmune interactions in pain

Neuro-immuno-endocrinology of sleep disorders and emotional stress

Novel functions of cytokines in the nervous system

The adrenal-cytokine connection in the HPA axis

Stress system (activators, mediators, effectors, counter-regulator), etc.



第13回日本発汗学会 総会のご案内

1. 会頭: 竹宮敏子(東京女子医科大学名誉教授, 同大学附属女性生涯健康センター)

2. 会期: 平成17年8月5日(金)、6日(土)

3. 会場: 東京女子医科大学病院 総合外来センター5階 大会議室

(都営地下鉄大江戸線若松河田駅より徒歩5分)

〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1

TEL 03-3353-8111(内線21581(小会議室))

4. プログラム

1) 特別講演: 「発汗波の特性」

演者: 小川徳雄先生(愛知医科大学名誉教授)

2) 教育講演

(1) 「温熱性発汗の調節機構」

演者: 菅屋潤壹先生(愛知医科大学 第二生理学)

(2) 「臨床検査としての発汗機能検査とその解釈における留意点」

演者: 斉藤 博先生(独立行政法人国立病院機構 宮城病院)

(3) 「老若男女の熱放散反応」

演者: 井上芳光先生(大阪国際大学 人間科学部スポーツ行動学科)

3) 一般演題: 口演8分、討論4分を予定しております。

4) 一般公開講座: 「顔と心と体について」

講師: かづき れいこ先生

(東京女子医科大学附属女性生涯健康センター 非常勤講師)

「『汗がかけない』大ピンチ 東洋医学からみた現代生活の罨」

講師: 浅岡俊之先生(浅岡クリニック)

5. 演題募集: 一般演題を募集いたします。

お申し込み方法(メール・郵送)は、下記総会事務局までお問い合わせ下さい。

演題締め切り: 平成17年6月6日(月)(必着)

6. 総会事務局

〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1 東京女子医科大学 看護学部臨床医学系内科学内
第13回日本発汗学会総会事務局 渡辺弘美
TEL: 03-3353-8111(内7064) FAX: 03-3357-4873
E-mail: watanabe@nurs.twmu.ac.jp

7. 応募資格: 演者・共同演者は日本発汗学会会員に限ります。未入会の方は下記にて入会手続きをお願いします。

8. 日本発汗学会事務局:

〒390-8621 松本市旭3-1-1
信州大学医学部器官制御生理学講座内
日本発汗学会 事務局
TEL: 0263-37-2597 FAX: 0263-36-5149
E-mail: i-seiri@sch.med.shinshu-u.ac.jp

第48回自動制御連合講演会/第1回横幹連合コンファレンス 講演募集(最終案)



主催学会:[自動制御連合講演会] 計測自動制御学会(幹事学会), 日本機械学会, システム制御情報学会, 化学工学会, 精密工学会, 日本航空宇宙学会(依頼中)

[横幹連合コンファレンス] 横断型基幹科学技術研究団体連合(横幹連合)

後援: 全国農業協同組合連合会長野県本部(JA全農長野), (財)ながの観光コンベンションビューロー(依頼中)

開催趣旨: 第48回目を迎える自動制御連合講演会は, これまで培ってきた制御関連の研究発表の場に加えて, 横断型学術を目指す横幹連合の第1回コンファレンスを併設する事により, 縦型学術と横型学術を融合させ, 学問・技術の新たな発展・展開を期して各種の企画を準備しています。各方面からの参加を期待します。

開催日: 2005年11月25日(金)~26日(土)

会場: JA 長野県ビル(長野市)

参加費: 会員7,000円, 学生会員2,000円, 会員外9,000円 (自動制御連合講演会, 横幹連合コンファレンスのすべての講演にご参加頂けます。すべての講演論文を収録したCD-ROM

講演論文集を含みます。)

登壇料: 2,000円

研究発表: 最新の学術的なご研究, または実システムへの応用研究等が望まれます。講演時間は15分を予定しています。募集研究分野は制御, 計測, システム, 情報, デザイン, 解析, 経営, 数理, ほか, 関連分野です。オーガナイズドセッションも多数企画予定です。

講演申込締切: 2005年8月12日(金)(予定)

講演申込: 「第48回自動制御連合講演会」は当該名称のホームページ(準備中)からのオンライン申込みとなります。「第1回横幹連合コンファレンス」は「第48回自動制御連合講演会」名のホームページよりお申込みください。その際, 「第1回横幹連合コンファレンス」への参加である旨明記してください。

諸事情によりオンライン申込みが不可能な場合には, (1)第48回連合講演会/第1回横幹連合コンファレンスの別, (2)表題(和文・英文), (3)著者全員の氏名(ふりがな/講演者に%) (4)講演要旨(100字から200字程度), (5)キーワード(最大3個), (6)講演者連絡先(氏名, 郵便番号, 住所, 所属, 部署, 電話, FAX, E-Mail)を記し, zawa@giptc.shinshu-u.ac.jpまでご連絡ください。

論文原稿提出締切: 2005年9月30日(金)(A4用紙2,4,6頁のいずれかで電子投稿。最大1Mbyte上限)論文原稿執筆要項, 送付先等についてはURL(準備中)をご参照ください。

自動制御連合講演会協賛学協会: 映像情報メディア学会, 応用物理学会, 可視化情報学会, 画像電子学会, 環境システム計測制御学会, 計装研究会, 自動車技術会, 照明学会, 信号処理学会, 人工知能学会, 石油学会, センシング技術応用研究会, 電気学会, 電子情報通信学会, 土木学会, 日本エム・イー学会, 日本応用磁気学会, 日本応用数理学会, 日本オペレーションズ・リサーチ学会, 日本経営工学会, 日本原子力学会, 日本建築学会, 日本行動計量学会, 日本シミュレーション学会, 日本神経回路学会, 日本神経科学学会, 日本生産管理学会, 日本生物物理学学会, 日本繊維機械学会, 日本造船学会, 日本体力医学会, 日本知能情報ファジィ学会, 日本鉄鋼協会, 日本人間工学会, 日本非破壊検査協会, 日本フルードパワー

システム学会, 日本マリンエンジニアリング学会, 日本リモートセンシング学会, 日本ロボット学会, バイオメカニクス学会, パワーエレクトロニクス学会, IEEE Control Systems Society Japan Chapter, IEEE Geoscience and Remote Sensing Society Japan Chapter(依頼中)
 横幹連合会員団体: 応用統計学会, 経営情報学会, 計測自動制御学会, システム制御情報学会, 社会・経済システム学会, スケジューリング学会, 精密工学会, 日本応用数学会, 日本オペレーションズ・リサーチ学会, 日本感性工学会, 日本経営工学会, 日本経営システム学会, 日本計算機統計学会, 日本計算工学会, 日本シミュレーション&ゲーミング学会, 日本シミュレーション学会, 日本社会情報学会, 日本植物工場学会, 日本信頼性学会, 日本デザイン学会, 日本知能情報ファジイ学会, 日本統計学会, 日本時計学会, 日本バーチャルリアリティ学会, 日本品質管理学会, 日本リモートセンシング学会, 日本ロボット学会, ヒューマンインターフェース学会, プロジェクトマネジメント学会, 文理シナジー学会, オフィス・オートメーション学会, 可視化情報学会, 研究・技術計画学会, 地域安全学会, 日本コンピュータ化学会, 日本数理学協会, 日本生物工学会, 日本バイオメカニクス学会, 品質工学会, 日本バイオフィードバック学会

研究助成



第22回井上學術賞 候補者の募集

本学会は(財)井上科学振興財団より第22回井上學術賞受賞候補者の推薦を依頼されています。

希望される会員は2004年8月20日までに学会事務局(送付先 〒113-0033 本郷四郵便局留め 日本神経科学学会 山根 慶子)に所定の用紙に必要事項を記入してお送りください(本学会からの推薦は1件とします)。

第22回(平成17年度)井上學術賞 受賞候補者推薦要項 財団法人 井上科学振興財団

1. 候補者の対象

自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績をあげた研究者。但し、年齢が平成17年9月20日現在で50歳未満の研究者に限ります。

2. 學術賞

本賞：賞状及び金メダル 副賞：200万円受賞件数は5件以内とします。

(注) 受賞者は、原則として1件につき1人とします。特に複数であることを必要とするときは、それらの研究者の寄与が同等であることを示してください。但し、この場合においても1件として取り扱います。

3. 推薦依頼先

下記の28学会、並びに当財団の理事・評議員等に推薦を依頼します。

4. 推薦件数

各推薦学会または各推薦者から、原則としてそれぞれ1件とします。

5. 提出方法

所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当財団あて提出願います。

6. 締切期日

平成17年9月20日(火)

7. 選考

当財団の選考委員会において選考し、理事会において決定します。選考の結果は、平成17年12月中旬に推薦者に通知します。

8. 學術賞の贈呈

平成18年2月3日(金)の予定

9. 推薦書提出先及び連絡先

財団法人 井上科学振興財団

〒150-0036 東京都渋谷区南平台町 15-15
南平台今井ビル 601

電話：03-3477-2738 FAX：03-3477-2747

日本数学会 日本発生生物学会 日本農芸化学会
 日本応用数学会 日本分子生物学会
 日本解剖学会 日本物理学会 日本地震学会
 日本神経科学学会 日本生物物理学会
 地球電磁気・地球惑星圏学会 日本神経化学会
 日本天文学会 日本気象学会 日本生化学会
 日本化学会 日本海洋学会 日本免疫学会
 日本動物学会 応用物理学会 日本癌学会

日本植物学会 電子情報通信学会 日本薬学会
日本細胞生物学会 日本金属学会 日本遺伝学会
高分子学会



第37回(2005年度) 内藤記念科学振興賞 候補者の募集

本学会は財団法人 内藤記念科学振興財団より
第37回(2005年度)内藤記念科学振興賞候補者
の推薦を依頼されています。

希望される会員は2004年9月3日までに学会
事務局(送付先 〒113-0033 本郷四郵便局留
め 日本神経科学学会 山根 慶子)に所定の用
紙に必要事項を記入してお送りください(本学
会からの推薦は1件とします)。

問い合わせ先

財団法人 内藤記念科学振興財団
113-0033 東京都文京区本郷3丁目42番6
号 NKDビル8階
電話(03)3813-3005 ファックス (03)3811-
2917 E-mail info@naito-f.or.jp

第37回(2005年度) 内藤記念科学振興賞候補者推薦要項

趣旨 人類の健康の増進に寄与する自然科学の
基礎的領域において進歩発展に顕著な功績の
あった研究者に対してほう賞を授与するもの
である。

申請者資格

- 1) 人類の健康の増進に寄与する自然科学の基
礎的研究において独創的テーマに取り組み、進
歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
- 2) 候補者は単独とするが、異なる研究グルー
プによる共同研究の場合には、連名であっても
良い。
- 3) 候補者の再度の推薦は差支えない。

推薦者 1) 下記27学会の代表者

高分子学会 日本獣医学会 日本農芸化学会
日本遺伝学会 日本植物生理学会 日本発生
生物学会 日本ウイルス学会 日本神経科学
学会 日本ビタミン学会 日本栄養・食糧学
会 日本神経化学会 日本病理学会 日本解
剖学会 日本生化学会 日本物理学会 日

本化学会 日本生物工学会 日本分子生物学会
日本癌学会 日本生物物理学会 日本免疫学
会 日本細菌学会 日本生理学会 日本薬学会
日本細胞生物学会 日本動物学会 日本薬理学
会

推薦方法 所定の用紙(候補者推薦書、候補者
概要、宛名シール)に必要事項を記入し、当財
団あて送付する。

締切日 2005年10月3日(月)財団必着

選考方法 選考委員会で審査し、評議員会の
同意を得て、理事会で決定する。

採否の結果は、2006年2月に候補者および推
薦者に通知する。

授賞式・顕彰

授賞式は受賞者夫妻を招いて2006年3月17
日(金)に行う。

受賞者には内藤記念科学振興賞(正賞：金メ
ダル、副賞：500万円)を贈呈する。



東レ科学技術賞

1. 候補者の対象 貴学協会が関与する分野で、
下記に該当するもの

- (1) 学術上の業績が顕著なもの
- (2) 学術上重要な発見をしたもの
- (3) 重要な発明をして、その効果が大きいもの
- (4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩
に大きく貢献したもの

2. 科学技術賞 2件前後。1件につき、賞状、
金メダルおよび賞金500万円

3. 候補者推薦件数 1学協会から2件以内

4. 推薦締切期日 平成17年10月7日(金)弊会
必着

5. 日本神経科学学会学会の推薦を希望される
方は規定の用紙に必要事項を記入し、平成17
年9月7日までに事務局(〒113-0033 本郷四郵
便局留め 日本神経科学学会 山根 慶子)に
お送り下さい。



東レ科学技術 研究助成

1. 候補者の対象 貴学協会が関与する分野で
国内の研究機関において自らのアイディアで萌

芽的基礎研究に従事しており、今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者(原則として推薦時 45 才以下)

2. 研究助成金 総額1億3千万円。1件3千万円程度まで10件程度。

3. 候補者推薦件数 1学協会から2件以内

4. 推薦締切期日

平成17年10月7日(金)弊会必着

5. 日本神経科学学会の推薦を希望される方は規定の用紙に必要事項を記入し、平成17年9月7日までに事務局(〒113-0033

本郷四郵便局留め 日本神経科学学会 山根 慶子)にお送り下さい。

* 各推薦書用紙は、ホームページからもダウンロードできます(6月中旬より)。

URL : <http://www.toray.co.jp/tsf/index.html>



「The Grand Hamdan International Award for Medical Sciences」

Grand Hamdan International Award に関して、以下のような依頼が届いておりますので、神経科学学会員の皆様にお知らせいたします。

Dear Doctor,

I am chair of the committee responsible for seeking and evaluating nominations for the Grand Hamdan International Award for Medical Sciences.

This year's topic is the

Molecular and Cellular Pathology of Neurological Disorders,

and details can be found at <http://www.hmaward.org.ae/intlawards.htm>

I am writing to seek your help in identifying individuals or organizations who may qualify for nomination, and have attached the two

sides of the advertisement showing the details. As you can see the value of the award is not insubstantial.

My request is twofold:

1. Please advertise the award in your institution; you may also wish to nominate someone.

2. Please pass the details on to scientists and clinicians who might be suitable applicants, or to institutions who would nominate them.

Many thanks for any help you can provide in this regard.

Best Wishes and Thanks,

公 募



理化学研究所脳科学 総合研究センター 病因遺伝子研究グループ チームリーダー およびユニットリーダー 公募のお知らせ

理化学研究所・脳科学総合研究センター(BSI)病因遺伝子研究グループは、この度新たなチームリーダー(TL)1名もしくはユニットリーダー(UL)複数名の公募を行います。

病因遺伝子研究グループは「脳を守る」領域に属し、構造神経病理研究チーム(TL: 貫名信行)、神経遺伝研究チーム(TL: 山川和弘)、元山研究ユニット(UL: 元山純)、山田研究ユニット(UL: 山田真久)、Moore研究ユニット(UL: Adrian W. Moore)からなり、神経変性疾患の病態の解明やてんかんの遺伝子の同定などを進めてきました。本グループにこの度新たにチームを1つあるいは複数のユニット

を設置することになりました。今回新しく設置されるチームまたはユニットは神経変性疾患または小児精神疾患の病態解明と治療を目指し、新たな研究戦略や、創薬のためのシステム構築などを現存研究チームと相補しながら展開することが期待されます。

チームリーダーは一定の研究費を受け、10名前後の研究員およびテクニカルスタッフからなるチームを組織して研究を行います。ユニットは小型で、3～5名程度の構成です。チームリーダーおよびユニットリーダーともに、年度毎の雇用契約で、給与は、経験・能力・実績に応じた年俸制です(その他の待遇は当研究所規程による)。また、5年ごとに国際評価委員会による評価を受け、高い評価を受けた場合は研究チームを更新でき、ユニットは途中でチームに拡大することもあります。応募者の国籍は問いませんが、BSI常勤を条件とします。またチームリーダーは、リーダーシップを発揮し、国際的環境の中で研究を推進し、またBSIの他チームとの共同研究を大きく展開させることが期待されます。着任時期は決定次第協議します。当研究センターおよび理化学研究所に関する情報は以下のホームページに掲載されています(<http://www.brain.riken.jp>)。

応募を希望される方は、1)履歴書、2)発表論文リスト、3)これまでの主な研究成果、4)これからの研究計画(A4用紙4枚以内)、5)3名の照会可能者の名前と連絡先を以下までお送り下さい。また質問等は、脳科学総合研究センター小委員会23 (search23@brain.riken.jp)までお問い合わせ下さい。

理化学研究所 脳科学総合研究センター サーチ小委員会23
〒351-0198 埼玉県和光市広沢2-1
ファックス：048-462-4796
E-mail: search23@brain.riken.jp
応募締切：2005年6月30日

理化学研究所脳科学 総合研究センター



「脳を創る領域」 チームリーダーおよび ユニットリーダー 公募のお知らせ

理化学研究所・脳科学総合研究センター (<http://www.brain.riken.jp>)では、「脳を創る」領域を再編し、これに伴い、複数の新しいチームおよびユニットのリーダーを募集します。本研究領域は、脳の情報処理の仕組みを計算理論により解明する「計算論的神経科学」および脳の仕組みにヒントを得た脳型の情報科学技術を確立する「脳型計算論」の二つのグループで編成します。研究テーマとして、たとえば、計算論的神経科学の諸分野、脳型ロボット工学、脳型情報技術開発、脳の言語システム、数理脳科学、などが考えられますが、これらに限定されるわけではありません。応募者が各自で提案してください。

チームリーダーは研究費を受け、5、6名程度の研究員あるいはテクニカルスタッフからなる研究チームを組織して研究を行います。ユニットは小型で、2、3名程度の構成です。チームリーダーおよびユニットリーダーともに、年度毎の雇用契約で、給与は、経験・能力・実績に応じた年俸制です(その他の待遇は当研究所規程による)。また、5年ごとに国際評価委員会による評価を受け、良い評価を受けた場合は研究チームを更新でき、ユニットは途中でチームに拡大することもあります。採用の審査に当たっては、領域の研究目標に適ったユニークで独創的な研究計画とともに、脳センターの他の研究チームと協力して研究を発展させていく方向が重視されます。

応募者は1)履歴書、2)発表論文リスト、3)これまでの主な研究成果、4)これからの研究計画(A4用紙4枚以内)、5)3名の照会可能者の名前と連絡先を以下まで提出してください。

理化学研究所・脳科学総合研究センター・
サーチ小委員会 22
〒351-0198 埼玉県和光市広沢 2-1
FAX : 048-462-4796
E-mail: search22@brain.riken.jp
応募締切 : 2005 年 6 月 30 日
質問は上記電子メールアドレス、サーチ小
委員会 22 まで。



大学院生(修士・博士) 募集および説明会

東京大学・大学院医学系研究科・脳神経医学
専攻
21世紀COEプログラム「脳神経医学の融
合的研究拠点」

募集対象：医科学修士課程、医学博士課程

受験資格

医科学修士課程：大学学部卒または平成 18 年
卒業見込みの者

医学博士課程：医学部、歯学部、獣医学部
卒業生またはそれ以外の学部の修士課程を
修了または平成 18 年 3 月修了見込みの者。

選考方法

医科学修士課程願書受付：平成 17 年 7 月 1
日から 8 日(郵送のみ、当日消印有効)

医科学修士課程入学試験：

筆記試験 8 月 15 日、一次発表 8 月 18 日

口述試験 8 月 19 日 (筆記試験合格者)

医学博士課程願書受付：平成 17 年 8 月 1 日
から 8 月 8 日(郵送のみ、当日消印有効)

医学博士課程入学試験：

筆記試験 10 月 17 日

口述試験 10 月 18 日

入試のお問い合わせは大学院掛(Tel:03-
5841-3309)へ。

大学院説明会

日時：平成 17 年 6 月 11 日(土) 午前 9 時
半から 12 時まで(説明会後各研究室見学)

場所：東京大学医学部教育研究棟 13 階 1304

号室

専門分野と主任は下記の通りです。ホーム
ページは、<http://NeuroCOE.umin.jp/>
からアクセスして下さい。お問い合わせ・
見学申込は E-mail で。

基礎神経医学

神経病理学 井原康夫

yihara@m.u-tokyo.ac.jp(募集しません)

神経生化学 尾藤晴彦

hbito@m.u-tokyo.ac.jp

神経生物学

脳神経発生・分化(医科研) 御子柴克彦

mikosiba@ims.u-tokyo.ac.jp

神経ネットワーク(医科研) 真鍋俊也

tmanabe-ky@umin.ac.jp

COE神経機能解明ユニット 河崎洋志

kawasaki@m.u-tokyo.ac.jp

認知・言語医学

認知・言語行動科学

認知・言語神経科学 坂井克之

ksakai-ky@umin.ac.jp

音声・言語医学 高山吉弘

y-taka@m.u-tokyo.ac.jp(募集しません)

感覚・運動神経医学 加我君孝

kimikaga-ky@umin.ac.jp

臨床神経精神医学

精神医学 加藤進昌

katon-ky@umin.ac.jp

神経内科学 辻 省次

tsuji@m.u-tokyo.ac.jp

脳神経外科学 桐野高明

tkirino-ky@umin.ac.jp

そ の 他

日本神経科学学会事務所
移動のお知らせ

本年3月10日に、日本神経科学学会事務所は、下記に移転し、4月1日より、日本神経科学学会英文機関紙 Neuroscience Research 編集部も、同事務所に移動となりましたので、お知らせいたします。電話番号 FAX 番号 E-MAIL ADDRESSは、下記のように、変更となりました。

新事務所

〒113-0033

東京都文京区本郷7丁目2-2 本郷ビル9F

日本神経科学学会

TEL 03-3813-0272 FAX 03-3813-0296

E-MAIL office@jnss.org

Neuroscience Research 編集部

TEL 03-3813-0295 FAX 03-3813-0296

E-MAIL editnsr@jnss.org神経科学ニュース、
神経科学学会ウェブサイトへ
の記事の掲載について

(メールアドレスが変更になりました)

学会への提言、研究雑感、学会見聞録、書評等神経科学の発展につながるものであればどのようなものでも結構ですのでお送りください。

1. 原稿は電子版のみを受け付けています。原稿は電子メール添付ファイルでお送り下さい。

(a) 受付可能なファイル形式は Word(2001 以前)、EG Word (11 以前)、Kacis Writer です。それ以外にも或る程度対応可能ですが、事前にご相談ください。また作製に用いた

アプリケーションに関わらず HTML、rtf ファイルは受付可能です。テキストファイルも可ですが、その場合メール本文に埋め込んでください。

(b) 画像ファイルは PICT、JPEG または TIFF ファイルで、可能な限り圧縮して本文とは別のファイルでお送りください。

2. 原則として校正は行いません(お送りいただいたファイルをそのまま利用します)ので、誤りの無いことをお確かめの上、原稿をお送り下さい。

3. ニュースへの掲載は1回のみとさせていただきます。

4. 求人情報、学会・シンポジウムの案内、助成金の案内などは特に御希望のない限り、神経科学学会のホームページにも掲載します。記事の長さには制限はありませんが、可能な限り簡潔におまとめ下さい。長すぎる原稿は一部割愛させていただきます場合があります。

5. また、他のサイトへのリンクは原則としておこなっておりませんのでご了承ください。

6.4 以外でホームページに掲載を特に希望される場合は御連絡下さい。

7. 締切は通例偶数月の月末25日ですが、都合により変動することがあります。

8. 掲載料は不要です。

9. 原稿の送付の宛先は以下の通りです。

10. ホームページのみへの掲載も上記1, 2にしたがって承ります。

news@jnss.org(担当 白尾智明)宛お送りください。

Ccを tshirao@med.gunma-u.ac.jp 宛にもお送りください。

編集後記

今月号から狩野先生に代わりニュースの編集を担当することになりました。狩野先生のもとで、このニュースは神経科学分野の情報紙として大きく発展してきました。今後さらに情報紙としての役割を充実させ、「このニュースさえ読んでいれば、世界の神経科学の動きが手に取るようにわかる」と胸を張れるようなニュースにしていきたいと思っております。編集小委員会の委員も6人体制から8人体制に変わりました。私と狩野先生以外の委員の方は、岡部繁男、久保義弘、見学美根子、坪川宏、畠義郎、銅谷賢二の各氏です。また、編集小委員会委員の誰にでもかまいませんから、会員諸氏で、「こんな情報があるのだけれど」とか、「こんな企画をやってみたらどうだろうか」とかというご意見がありましたら、是非、気軽に声をかけてください。ところで、本号の記事にもありますように、私がニュースの担当に移るに伴い、ホームページ担当は柚崎先生に代わりました。曲がりなりにもホームページを立ち上げたのは、今から約10年まえで、当時サーバーは群馬大学内においてありました。現在は、独立したドメインネームを取得し、レンタルサーバーを使ってホームページを維持しています。ホームページを立ち上げた初期は、ブラウザがモザイクからネットスケープに変わった時期で、また、電話回線を介してのみインターネットにアクセス可能な研究室がたくさんありました。そこで、非常にシンプルなホームページを作ったわけですが、大幅なりニューアルはその後一度も行われていません。また、個人情報に関する考え方も十人十色で、会員の連絡先等のアップロードも果たすことが出来ませんでした。今年度から法律により個人情報の保護に関する規定が整備され、柚崎先生のもとで、ホームページの大々的なりニューアルが達成されると思います。この十年間、ホームページのアップロードでお世話になってきた当教室歴代の秘書の方々（田辺さん、中里さん、桑原さん）それから英語のページを作製・維持してくれた大学院生（現在D3）の小林千穂さんに誌上を借りて深謝します。（白尾記）

発行：広報委員会

狩野方伸（委員長）

白尾智明（ニュース編集小委員会委員長）

真鍋俊也（電子化推進小委員会委員長）

柚崎通介（ホームページ担当小委員会委員長）